



九州大学
KYUSHU UNIVERSITY

九州大学広報課

〒819-0395 福岡市西区元岡 744

TEL:092-802-2130 FAX:092-802-2139

Mail:koho@jimu.kyushu-u.ac.jp

URL:https://www.kyushu-u.ac.jp

PRESS RELEASE (2024/07/18)

九州大学の溝口孝司教授が、英国学士院国際会員に選出

～国内で9人目、九州大学より初の選出～

このたび、本学比較社会文化研究院・溝口孝司教授（アジア埋蔵文化財研究センター長、地球社会統合科学府担当、共創学部担当）が、7月17日、英国学士院の国際会員に選出されました。日本からは10年ぶり9人目の選出です。

英国学士院（The British Academy）は、1902年設立の人文科学ならびに社会科学分野における国立アカデミーです。The Royal Society（王立協会）が自然科学分野をその対象とするのに対し、英国学士院は人文社会科学を対象とする団体です。英国学士院のフェローシップとなりうるのは人文社会科学において際だった業績を挙げた、英国における各分野の代表的な研究者に限られており、その称号（ポスト・ノミナル・レターズ）であるFBA（Fellow of the British Academy）の使用を許されることは、研究者としての最高の名誉の一つとなっています。また、国際会員（インターナショナル・フェローシップ）への選出は、人文科学および社会科学における学術的な卓越性が認められ、英国以外の居住者に英国学士院が授与する最高の栄誉であり、クロード・レヴィ＝ストロース（人類学）、ユルゲン・ハーバーマス（社会学）、フェルナン・ブローデル（歴史学）、丸山真男（政治学）など、過去の会員には世界最高峰の知識人が名を連ねています。

溝口孝司教授のコメント

このたびの選出には大変驚きますとともに、これまで続けてきた＜社会考古学＞発展への努力がこの様な形で国際的認知と評価をいただきましたことを大変うれしく名誉に思っております。この名誉は九州大学考古学の伝統、また日本考古学の発展の歴史に基づくものであり、今後とも自らの内に根ざすローカルな蓄積を大切にしつつ、グローバルな貢献を続けてゆく所存です。



比較社会文化研究院・溝口孝司教授

英国学士院の会員

英国学士院のフェローシップは、人文社会科学において際だった業績を挙げた英国における各分野の代表的な研究者に限られています。また、国際会員（インターナショナル・フェローシップ）は、人文科学および社会科学における学術的な卓越性が認められ、英国以外の居住者に英国学士院が授与する最高の栄誉です。溝口教授の国際会員選出は、日本からは9人目かつ九州大学からは初の快挙となります。

<参考>これまでの日本での国際会員

- 高楠順次郎氏（東京帝国大学 仏教学 1936年選出（以下同））
- 辻直四郎氏（東京大学 言語学 1971年）
- 服部四郎氏（東京大学 言語学 1976年）
- 丸山真男氏（東京大学 政治学 1982年）
- 秋山光和氏（東京大学 美術史学 1988年）
- 細谷千博氏（一橋大学 国際政治学 1995年）
- 佐々木毅氏（東京大学 政治学 2004年）
- 吉田豊氏（京都大学 言語学 2014年）

* 森嶋通夫氏（ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス 経済学 フェローシップ 1981年）

溝口孝司教授 経歴

1986（昭和 61）年 九州大学文学部卒業
 1988（昭和 63）年 九州大学文学研究科修士課程修了
 1990（平成 2）年 九州大学文学研究科博士後期課程退学
 1990（平成 2）年 ケンブリッジ大学考古人類学部考古学科博士課程入学
 1994（平成 6）年 九州大学文学部・助教授着任
 1994（平成 6）年 九州大学大学院比較社会文化研究科・助教授へ配置換
 1995（平成 7）年 ケンブリッジ大学より博士号（哲学博士）の授与（Ph. D.）
 2012（平成 24）年 九州大学大学院比較社会文化研究院・教授
 2019（平成 31）年 九州大学アジア埋蔵文化財研究センター長

現在に至る

* 2008（平成 20）年 ロンドン考古協会（The Society of Antiquaries of London）フェロー
 * 2013（平成 25）年 世界考古学会議会長（現職）
 * 2022（令和 4）年 日本イコモス国内委員会副委員長（現職）

受賞歴

2006（平成 18）年 日本学術振興会賞
 2014（平成 26）年 九州考古学会賞大賞
 2015（平成 27）年 日本考古学協会賞大賞

溝口孝司教授の研究と活動の特徴

溝口教授の研究は「社会考古学（Social Archaeology）」と呼ばれるもので、過去の社会の復元と、現代社会におけるその意味を交差・往還しながら考察・研究する点に特徴があります。当該部門の世界的第一人者として、アジアからただ一人、権威ある考古学事典（Encyclopedia of Archaeology, Second Edition (Elsevier/Academic Press, 2024)）の理論的大項目（‘Post-processual Archaeology’）を執筆しています。

溝口教授の研究の柱は：

- 過去における＜記憶（memory）＞の社会的利用様態とその意味・機能の考古学的研究
- ネットワーク分析的手法を応用した集落間、地域間関係における中心—周辺の出現と社会の成層化メカニズムの考古学的研究
- コミュニケーション理論・社会システム理論に基づく宗教行為の復元とその社会的機能・変容過程の考古学的研究
- 考古学研究のモード（研究対象・研究方法・研究目的・導かれる結論の傾向性）の変化が、同時代社会の構造・システムとどの様に相関し、相互構築的関係にあるか、の四つの研究です。

＜記憶＞の研究においては、主に墓地・葬送儀礼を対象として、死者の記憶が葬送儀礼を執行する生者たちによってどのように思い出されたか、それが当時の社会構造やシステムとどのように関連していたかを研究しています。＜ネットワーク＞の研究においては、定住集落が「友達の輪」のように、人やものや情報の流通によって結ばれるにつれて、自然に生じてくる（＜創発＞してくる）＜中心性＞の違い（人やものや情報の流通において、集落同士のやり取りを「仲介する」頻度の違い）が、社会の成層化と複雑化の過程とどのように関わっているかを研究しています。＜宗教＞研究では、社会という現象を「コミュニケーションが続いてゆくことの束（たば）」として捉え、これが「うまく行かない」時に、それに理由付けして納得したり、考え方や行いを改める「仕掛け」として宗教を捉え、社会の変化と宗教的行為の変化を考古学的に復元・研究しています。

溝口教授は以上を総合して、人類のコミュニティはそれぞれどのようにしてその社会を維持したのか、その社会が維持され、変化するメカニズムとは何か、社会が複雑化、広域化し、国家的な社会編成に至るメカニズムとは何か、について現在研究を進めています。

また、＜考古学と同時代社会の関係性＞研究では、主に日本考古学の研究史を対象として、日本という領域国民国家の形成と成熟過程の諸段階が、考古学の実践モードとどの様に相関性・相互構築的関係にあるのかを、＜記憶＞、＜ネットワーク＞、＜宗教＞研究における研究史の検討とも絡めつつ研究を続けています。

これらの成果に加え、2013 年に選出以来、会長職を務めている世界考古学会議（World Archaeological Congress）の活動もあります。世界考古学会議はあらゆる国の過去への関心を促進し、地域に根ざした歴史の発展を奨励し、国際的な学術交流を促進することを目指す世界の考古学者のコミュニティです。4 年ごとに世界大会を開催していますが、溝口教授は会長として第 8 回世界大会（京都）、また、コロナ禍の中、第 9 回世界大会（プラハ）を成功裡に開催し、大きな成果を上げました。このような活動は、＜考古学と同時代社会の関係性＞研究の成果に基づく世界規模での実践でもあります。

代表的な著書

- *An Archaeological History of Japan: from 40,000 BC to AD 700* (University of Pennsylvania Press, 2002).
- *Archaeology, Society and Identity in Modern Japan* (Cambridge University Press, 2006).
- *The Archaeology of Japan: from the Earliest Rice Farming Villages to the Rise of the State* (Cambridge University Press, 2013).
- *Global Social Archaeologies: Making a Difference in a World of Strangers* (with Claire Smith. Routledge, 2019).
- *社会考古学講義：コミュニケーションを分析最小単位とする考古学の再編*（同成社、2022）.

英国学士院のアジェンダ

英国学士院は、1902 年設立の人文科学ならびに社会科学分野における国立アカデミーです。The Royal Society（王立協会）が自然科学分野をその対象とするのに対し、英国学士院は人文社会科学を対象とする団体です。

英国学士院の目的は以下の通りです（選出通知文書より引用）。

‘...時間と場所を超えて、人々、社会、文化に対する理解を深め、共有することであり、それによってすべての人が学び、進歩し、繁栄できるようにすることです。フェローは、社会に貢献するアカデミーを支える重要な役割を担っています。フェローは、私たちが授与する助成金、若手研究者への支援、公共政策への取り組み、イベントを通じての一般市民の参加など、アカデミーのあらゆる活動を監督・支援しています。

人工知能から気候変動まで、繁栄の構築から幸福の向上まで、今日の複雑な課題は、人間、文化、社会に対する洞察を深めることによってのみ解決できます。私たちは、英国内外の研究者やプロジェクトに投資し、斬新な考え方や議論で一般の人々を巻き込み、学者、政府、企業、市民社会を結集して、すべての人の利益のために政策に影響を与えることを目指しています。

また、人文・社会科学全般にわたり、英国および国際的な学術研究、キャリア開発、より広範な関与を支援するための資金を分配しております。

私たちは知識、専門家の洞察、そして今日の社会が直面している課題の背景、意味、現実性を探求する場を提供します。...’

【The British Academy の URL: <https://www.thebritishacademy.ac.uk/>】